

参考資料

<ワークショップの内容の詳細>

今回の会議は以下の3つのテーマに沿って行われました。

(1) カンキツグリーンング病が新たに侵入した国や地域における被害域拡大阻止に向けた研究

この10年間にカンキツグリーンング病が侵入し被害が拡大している、南北アメリカ大陸及び日本国内における防除に向けた取組について、報告が行われました。本病がカンキツ類の産地で広がっていくメカニズムについて、さらなる圃場レベルでの研究と疫学的考察の必要性、そのための調査手法の改良が急務であること等が確認されました。

(2) 激発地におけるカンキツグリーンング病管理技術とその研究の現状

東南アジアのカンキツグリーンング病激発地における防除の取組と防除技術開発の現状及びそのための国際共同研究の現状と展望について報告が行われました。すでに本病による汚染が進んだ激発地においては、複数の病害管理技術を組合せた総合的管理による持続的な生産が目標であること、そのための既存の個々の管理技術の有効性の検証、持続的な管理技術の開発、管理技術を普及する上での問題点などが議論されました。

(3) カンキツグリーンング病の疫学の基礎的研究

我が国で行われているカンキツグリーンング病の病原体の遺伝子の分離方法や本病を媒介する昆虫「ミカンキジラミ」の生態やその研究手法に関する研究例が報告されました。

用語解説

*カンキツグリーンング病

カンキツグリーンング病（黄龍病（Huanglongbing : HLB）ともよばれる）は、カンキツ類の樹の篩管に寄生する細菌により引き起こされ、病原細菌には、アジア型、アメリカ型、アフリカ型の3種が存在する。このうち、カンキツグリーンング病が問題となっているアジア・南北アメリカの熱帯・亜熱帯地域に広く分布するのは、アジア型（*Candidatus Liberibacter asiaticus*）である。南米には、アジア型とアメリカ型（*Candidatus Liberibacter americanus*）の2種が分布する。この2種は、ともにミカンキジラミ（*Diaphorina citri*）という体長3ミリ程度の小さな昆虫により媒介される。また、接ぎ木によっても伝染する。病原細菌は、いまだに培養することができないため、研究が遅れている。

カンキツ類の樹が本病に罹ると、葉がまだら状に黄色くなり、変形し、おかされた枝が黄色い龍の姿に見えることから、黄龍病という名前が付けられた。一方、果実は成熟が悪く黄色くならず、まだら状に緑色になり、種子の形成が悪くなる。グリーンング病という名前は、この果実の症状に由来する。罹病した樹では、枝先から枯れはじめ、次第に樹が衰弱し、やがて樹全体が枯れる。一旦罹ると、根本的な治療法はなく、病気に罹っていない

い健全苗の植え付けと媒介虫の駆除が主な対策とされている。

我が国では、沖縄県と鹿児島県の南西諸島の一部で発生が確認されている。



ワークショップ参加者集合写真